

英語コーパス学会第33回大会

ワークショップ《二乗検定再入門》10:00~11:45 (9:30受付開始)

会場：D棟(D416教室)

講師：田中 省作(立命館大学)、小林 雄一郎(法政大学非常勤講師)

定員：先着45名 参加費：会員無料・非会員1,000円(申し込みは郵便・電子メールで事務局まで)

日時 2009年4月25日(土)
会場 神戸大学国際文化学研究所(鶴甲第1)キャンパス(〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 1-2-1 <http://www.kobe-u.ac.jp>)
受付開始 12:00 K303教室
開会式 13:00 K301教室

1. 会長挨拶
2. 開催校挨拶
3. 総会
4. 事務局からの連絡

司会 山崎 俊次(大東文化大学)
赤野 一郎(京都外国語大学)
加藤 雅之(神戸大学国際コミュニケーションセンター長)

<研究発表第1室(K301教室)>

研究発表1 13:40~14:10

Piers Plowman における否定接辞 *in-* と *un-* の考察

研究発表2 14:15~14:45

動詞 *take* が現れる *Retroactive Gerund* 構文の分析：BNC を利用して

研究発表3 14:50~15:20

動詞由来名詞の補語の継承可能性：BNC 調査を中心として

<研究発表第2室(K302教室)>

研究発表1 13:40~14:10

多次元分析による日本とアジア諸国の英語教科書研究

研究発表2 14:15~14:45

日本人英語学習者のイベントスキーマと文型への親密度：JEFL Corpus の分析を通して

実践報告 14:50~15:20

パラレルコーパスを活用した学習者中心の英語授業

<休憩 15:20~15:40 >

シンポジウム 15:40~18:10 (K301教室)

《コーパスと統計で解き明かすポリティカルディスコース》

語彙頻度と統計的手法：英国二大政党のマニフェストにみる特徴語

コーパスに基づく批判的言語分析：首相官邸英文メールマガジンの量的語彙解析

多変量アプローチで俯瞰する歴代米国大統領就任演説の言語変異：Washington から Obama まで

歴代米国大統領就任演説における統語構造の変異

言語研究と統計：記述と推測

閉会の辞

司会 山崎 聡(千葉商科大学)
岡田 晃(大東文化大学大学院生)
住吉 誠(摂南大学)
森田 順也(金城学院大学)
司会 成田 真澄(東京国際大学)

村上 明(東京外国語大学大学院生)
能登原 祥之(比治山大学)
中條 清美(日本大学)
西垣 知佳子(千葉大学)

司会 田畑 智司(大阪大学)
講師 高見 敏子(北海道大学)
講師 石川 慎一郎(神戸大学)
講師 田畑 智司(大阪大学)
講師 後藤 一章(大阪大学)
講師 前田 忠彦(統計数理研究所)
石川 慎一郎(神戸大学)

懇親会 時間：18:30~20:30 場所：A棟多目的ルーム 会費：4,000円

英語コーパス学会 (Japan Association for English Corpus Studies)

会長 赤野 一郎 事務局 〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1 大東文化大学 山崎俊次研究室

TEL: 03-5399-7372 E-mail: yamazaki@ic.daito.ac.jp 振替口座 00940-5-250586

URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html>

- ◆ 大会当日、入会受付もいたしますので、お誘い合わせの上ご参加下さい(年会費 一般5,000円 学生3,000円)。
- ◆ 「当日会員」としての参加も受け付けております(会費1,000円)。

英語コーパス学会

第 33 回大会資料

日時: 2009 年 4 月 25 日 (土) 午後 1 時より (正午受付開始)

会場: 神戸大学国際文化学研究科 (鶴甲第 1) キャンパス

(<http://www.kobe-u.ac.jp>)

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 1-2-1

第 33 回大会プログラム

ワークショップ《二乗検定再入門》

会場：D棟(D416教室)

時間：10:00～11:45(9:30受付開始)

講師：田中 省作(立命館大学)、小林 雄一郎(法政大学非常勤講師)

定員：先着45名

参加費：会員無料・非会員1,000円(申し込みは郵送・電子メールで事務局まで)

日時 2009年4月25日(土)

会場 神戸大学国際文化学研究所(鶴甲第1)キャンパスK棟

受付開始 12:00 K303教室

開会式 13:00 K301教室

1. 会長挨拶
2. 開催校挨拶

司会 山崎 俊次(大東文化大学)
赤野 一郎(京都外国語大学)
加藤 雅之(神戸大学
国際コミュニケーション学長)

3. 総会

4. 事務局からの連絡

<研究発表第1室(K301教室)>

研究発表1 13:40～14:10

Piers Plowman における否定接頭辞 in- と un- の考察

研究発表2 14:15～14:45

動詞 take が現れる Retroactive Gerund 構文の分析：BNC を利用して

研究発表3 14:50～15:20

動詞由来名詞の補部の継承可能性：BNC 調査を中心として

<研究発表第2室(K302教室)>

司会 山崎 聡(千葉商科大学)

岡田 晃(大東文化大学大学院生)

住吉 誠(摂南大学)

森田 順也(金城学院大学)

司会 成田 真澄(東京国際大学)

研究発表1 13:40～14:10

多次元分析による日本とアジア諸国の英語教科書研究

研究発表2 14:15～14:45

日本人英語学習者のイベントスキーマと文型への親密度：JEFLL Corpus の分析を通して

実践報告 14:50～15:20

パラレルコーパスを活用した学習者中心の英語授業

<休憩 15:20～15:40>

シンポジウム 15:40～18:10 (K301教室)

《コーパスと統計で解き明かすポリティカルディスコース》

語彙頻度と統計的手法：英国二大政党のマニフェストにみる特徴語

コーパスに基づく批判的談話分析：首相官邸英文メールマガジンの量的語彙解析

多変量アプローチで俯瞰する歴代米国大統領就任演説の言語変異：Washington から Obama まで

歴代米国大統領就任演説における統語構造の変異

言語研究と統計：記述と推測

閉会の辞

司会 田畑 智司(大阪大学)

講師 高見 敏子(北海道大学)

講師 石川 慎一郎(神戸大学)

講師 田畑 智司(大阪大学)

講師 後藤 一章(大阪大学)

講師 前田 忠彦(統計数理研究所)

講師 石川 慎一郎(神戸大学)

《懇親会 時間：18:30～20:30 場所：A棟多目的ルーム 会費：4,000円》

【ワークショップ】

「二乗検定再入門」

田中 省作(立命館大学)

小林 雄一郎(法政大学非常勤講師)

コーパス言語学研究では、イギリス英語とアメリカ英語における特定の統語構造(たとえば、help+O+TO-INF/help+O+BARE-INF)の使用傾向の違い、複数のジャンル・法助動詞間での使用傾向の違いといった問題が、コーパス(グループ)間の頻度分布の違いに帰着することは少なくありません。このようなときに役立つのが、多くの統計の入門書で解説されている χ^2 二乗検定です。一見すると素朴で初歩的な分析法に思いますが、実はとても汎用性が高く、また一方で注意が必要なものでもあります。そこで、本ワークショップでは、このような χ^2 二乗検定のエッセンスを理解し、実際にさまざまな言語データを正しく分析するためのノウハウを実践的に学びます。

検定は統計の中心的な話題の一つで、最近では Excel や Web 上で多様な検定が気軽に行えるようになりました。他方、検定の手続きは知っているものの、今一つ具体的なイメージがわからない、という方も少なくないのではないのでしょうか。そこで、ワークショップの前半(田中担当)では、まず基本的な検定の考え方を直感的に説明し、後半の χ^2 二乗検定への橋渡しを行います。

ワークショップの後半(小林担当)では、フリーの統計分析環境である R を用いて、 χ^2 二乗検定についてハンズオンの実習を行います。まず、二つのコーパス間における頻度分布の違いを考察するための“二グループに対する χ^2 二乗検定”をメインに扱います。次に、 χ^2 二乗検定を使う際によく出会う問題の一つである低頻度問題への対処法(イエイツの連続補正など)や、やや中級者向けではありますが三グループ以上の頻度分布を比較し、分布の違う二グループを同定したい場合の方法(“M グループに対する二乗検定”や対比較など)について説明します。

実習で使う R のコマンド操作に苦手意識を持たれる方もおられるかと思いますが、今回のワークショップで使うスクリプトは、最長で二行(データの読み込みに一行+統計分析に一行)の短いもので、R に関する事前知識は前提としていませんので、気軽にご参加ください。

【研究発表第1室】

【研究発表1】

Piers Plowman における否定接頭辞 in- と un- の考察

岡田 晃(大東文化大学大学院生)

現代英語(PE)の語彙や形態素には外来語起源のものが数多く存在している。PE に残り、比較的良好に使われている外来否定接辞としては dis-, in-, non-などが挙げられるが、いずれも中英語期(ME)に英語に流入し、以来、絶えることなく英語内でその用法が確立していったと考えられる。意味論的な視点から見ると、本来、全く同じ用法・意味を持っている語というものは存在しない。影山(1999)でも述べられているように、「接頭辞はそれぞれ固有の意味を持っている」と解釈できる。これら3つの接頭辞と対照的なのが本来語の un-である。この un-は古英語期(OE)から PE に至るまで、生産性の高い接頭辞として、英語話者により使用されてきた。これらの否定接頭辞については、Siegel(1974)、

Allen(1978), Selkirk(1985)などの言語学者が研究に携わっている。彼らの研究は PE における使用法の違いということに焦点を当て、言語学的な考察を行っているが、通時的な視点からはなされていない。ME 期における考察は不十分である。そこで中英語期中の否定接辞 un-の考察に関して米倉(1995)ではチョーサーの語形成を調査し、チョーサーの言語の本質を明らかにしようと試みている。また、Kwon(ICAME JOURNAL No. 21 April 1997)では、Chadwyck-Healey's English Poetry Full-Text Database を使い、1300 年から 1800 年までにおける詩中の in-/un-の二重語を取り上げ、各年代別の頻度を調査している。ここで扱う *Piers Plowman* は後期中英語期に書かれた頭韻詩で、社会批判を含む ME 文学の重要な宗教詩であるが、この作品における語彙の研究、特に否定接辞の考察は少ない。ここでは、英語の否定接頭辞研究の一部として in-と un-の 2 つを取り上げ、*Piers Plowman* で使われている in-派生語、及び un-派生語を検索し、その中で特定語彙に偏った特徴が見られるか否かを考察していく。さらに、それらの否定接辞がどのくらいの頻度で[+ latinate]もしくは[- latinate]素性の基体に付加されているのか、つまり、外来接辞である in-の英語への定着、本来語である un-の造語力を示すため、それぞれの派生語を type 数と token 数とに分けて数量的に処理していく。また付加される各品詞の頻度を考察し、作者 Langland が後期中英語期にどのような語を使用したのかを考察していく。さらに、頭韻が in-, un-選択の条件となっているか否かにも言及したい。

【研究発表 2】

動詞 take が現れる Retroactive Gerund 構文の分析：BNC を利用して

住吉 誠(摂南大学)

本発表では、(1)のような take が現れる Retroactive Gerund 構文について、BNC から用例を抽出し、実証的な分析を行う。

- (1) a. Such scars will take a lot of healing. (BNC)
- b. it is a vicious circle which takes some breaking... (BNC)

(1)の例からわかるように、この構文に現れる doing の特徴としては a lot of / some などの限定詞と共に起ることが挙げられる。このことから、この healing や breaking を純粋な名詞であると考え向きがあるが、本発表では、そうではないことをまず冒頭で指摘したい。need などがとる Retroactive Gerund 構文にもこのような形は見られるし、また、このような doing を名詞と考えると、We would take some convincing that it can be right to depart from it by punishing more harshly than an offender deserves... (BNC) のような文の構造的な説明が困難になる。

次に、BNC に出現した例をもとに、doing に生じる動詞の意味特徴として、大きく「状態変化」「伝達行為」「動作」という意味特徴に分けることができることを指摘する。この take が現れた Retroactive Gerund 構文は「時間がかかる」と「難しい」の 2 つの意味を持つが、動詞が「状態変化」の意味特徴を持つ場合は前者の、「伝達行為」「動作」の意味特徴を持つ場合は後者の意味になる傾向が強いことを指摘する。さらに、文脈的な要因がこの解釈の揺れに影響する可能性も見てみたい。このような解釈は、a lot of / some で行為の量が示されるといふこの構文の特徴に関係していると考えられるが、この解釈過程は日本語の「よく」と類似していることを指摘する。また、(2)のような構文も比較検討し、(1)の基本タイプと統語的にどのように違うか検討したい。

- (2) Succeeding at my drinking career had taken some doing, even perseverance. I was never really cut out for drinking—I just wasn't that good at it. (Michael J. Fox, *Lucky Man* (2002), p. 154. New York: Hyperion)

最後に、このような語法研究においてコーパスに用例を求めることの意義について考えたいと思う。

【研究発表3】

動詞由来名詞の補部の継承可能性：BNC 調査を中心として

森田 順也(金城学院大学)

継承現象 派生語がその基体と同一の補部構造を持つ現象 は、形態論研究の重要なテーマの1つになっている。派生語の補部型(e.g. [+ NP])を基体の補部型から規則的に導き出せれば、文法をより簡潔に記述することが可能になる。本発表の目標は、事象名詞化に伴う基体動詞の補部の継承を詳細に調査することによって、関連する記述的一般化を試みることにある。

最初に、継承に関する各種の理論を概観し言語事実に関する予測を分類する。Quirk et al.(1985)及び Levin(1993)に基づいて関連する動詞の補部を計 12 の型に類別した後で、派生名詞化に伴う上記の補部型の継承可能性に関する各システムの予測を列挙する。Randall(1982)の原則からは、[+ NP]型のみが継承可能と予測される。一方 Grimshaw (1990)のメカニズムに従うと、[+ NP to VP], [+ NP that S], [+ NP wh S], [+ NP NP]を除くすべての補部型が継承できる。これら 4 つの補部型に加えて、Kayne(1981)のシステムは、場所交替型(e.g. [+ NP PP[+with]], to inject a patient with photosensitive drugs)も継承できないと予測させる。

次に、BNC を最大限に利用した事実観察によって、従来の理論の予測が的確でないことを示すと共に記述的一般化を提示する。具体的には、Lehnert(1971)及び Hornby(1974)の補部型情報を利用して、上記 12 種の補部を取る動詞の派生語のリスト(計 570 タイプ)を作成した後、BNC を駆使して各派生語の継承の例を網羅的に収集する。調査結果は以下の 3 点にまとめることができる。 [+ NP NP] (e.g. *Bill's assignment of Mary (of) a sonata)以外のすべての補部型に対する継承の例が BNC に見出せる。名詞化の際に完全に継承される補部([+ NP], [+ PP])、完全に継承されない補部([+ NP NP)、一部継承される補部(残りの 9 タイプ)という具合に、継承性に関する補部の階層関係(ランキング)が認められる。各補部型に属する派生語の BNC 生起度の比較によって、中間領域に存在する補部間に継承力の段階性を確認できる。

【研究発表第2室】

【研究発表1】

多次元分析による日本とアジア諸国の英語教科書研究

村上 明(東京外国語大学大学院生)

先行研究・研究設問

EFL 環境において教師の発話等と並び主要なインプットとなるのは英語教科書である。その重要性から英語教科書については数多くの研究が行われており、その一つの下位分野として英語教科書の国際比較が挙げられる。また最近は言語教育研究におけるコーパス利用の一環として、教科書コーパスが教科書研究において盛んに用いられている。しかし先行研究において用いられている比較言語指標は概ね語彙ベースであり、比較項目も少数である。上記を踏まえ本研究では以下の研究設問に解答する。

1. Biber の多次元分析を日本・中国・韓国・台湾の英語教科書比較に適用すると、どのような類似点・相違点が見られるか
2. 教科書英語とオーセンティックな英語それぞれの多次元モデル間でどのような類似点・相違点があるか

手法

まず日本の中学校と高等学校、中国・韓国・台湾の小学校から高等学校までの英語教科書をコーパス化し、各教科書をセクション/パッセージ単位で分けた。次にそれぞれに話し言葉又は書き言葉の指標を付与し、各教科書内の話し言葉テキスト、書き言葉テキストをそれぞれ一つにまとめた。それらを2000語毎に区切ったところ、計662テキストとなった。そしてBiber(1988)で用いられている言語項目の中で、品詞・レンマ情報のみで再現可能な56項目の各テキスト内での頻度をカウントし、その中で一定の頻度が観察された21言語項目を観測変数として662テキストを対象に因子分析を行い、三因子を抽出した。また残りの35項目の中で高校教科書にもあまり見られない数項目を上位概念にまとめるなどし、計24言語項目を観測変数として高校の英語教科書のみを対象に再度因子分析を行い、三因子を抽出した。

結果・考察

一般的な英語では話し言葉は書き言葉よりも多様な言語項目を用いる傾向にあり、それは韓国を除く三ヶ国の英語教科書にも当てはまる。つまりこの意味では英語教科書はオーセンティックである。そしてその中でも特に日本の話し言葉部分は他国の対応箇所よりも多くの言語項目を用いている。また、中国と台湾の英語教科書は言語的に類似しており、日本と韓国の英語教科書も類似している。つまり対象となった四カ国は中国・台湾グループと日本・韓国グループに分けることができる。そして中国の教科書は日本・韓国のそれよりも難解である可能性があり、台湾もその傾向を示している。

また、上記多次元モデルとBiber(1988)の多次元モデルを比較することにより、以下を主張することができる。まず教科書は一般的な英語と比較し、温和な表現が多く、専門的な英文は少ない。また過去分詞による後置修飾など上級レベルの項目には高校の教科書においても頻度が一般的な英語と比較して低いか、一般的な英語内と異なる振る舞いをしているものが多くある。

【研究発表2】

日本人英語学習者のイベントスキーマと文型への親密度：JEFLL Corpusの分析を通して

能登原 祥之(比治山大学)

本研究は、日本人英語学習者(大学生)の未発達で断片的になりやすい「動詞パタン(verb pattern)」(Palmer, 1938; Hornby, 1956; Francis, Hunston, Manning, 1996; Hunston & Francis, 1998; 2000)に注目する。そして、(1)学習者のどの「動詞パタン知識」を、(2)いかに構築し拡張できれば、(3)英作文教育の際いかに効果的か、の3点を実証的に明らかにしていく研究の一部である。特に、本発表は、(1)の問題に取り組むため、学習者の「動詞パタン知識」の現状を大規模学習者コーパス JEFLL Corpus(投野他, 2007)を通して把握するものである。

本発表では、特に、英作文教育を念頭に、教育的意義があると思われる「イベントスキーマ」と「文型」の視点を、動詞分析の「条件」として加え、学習者コーパスの分析を行った。条件設定の際、Radden & Dirven(2007:269-301)を参考に、英語母語話者の11種類の「典型的なイベントスキーマとそれに伴う文型」を確認した。さらに、本発表では、日本人英語学習者が苦手とされる「中間構文」の場合も別に抽出し、計12種類で「相対的な親密度」を見ていくこととした。分析の際、使用した12種類の動詞と限定条件は以下の通りである。(1) be (Occurrence: States / SVC)、(2) become (Occurrence: Processes / SVC)、(3) be (Spatial: Location / SV)、(4) move (Spatial: Object Motion / SV)、(5) have (Possession / SVO)、(6) like (Emotion / SVO)、(7) see (Perception & Cognition / SVO)、(8) break (Action / SVO)、(9) sell (Action Mid / SV)、(10) go (Self-Motion / SV)、(11) put (Caused Motion / SVO)、(12) give (Transfer / SVO)。デー

タの同定作業は目視で行い、同定の際、(1)採用基準(イベントスキーマと文型の両方の限定条件が満たされていること、など)、(2)除外基準(日本語で表現されている場合、ミススペルの場合、文法的に不適切な場合、形から同定が難しい場合、意味的に不自然な場合、重複データの場合、など)を事前に決めて分析を行った。

調査手順として、(1) n-gram 分析を通して、動詞を中心とした頻出語群の特徴を調べ、学習者は各動詞においてどのような語群や構文をとる傾向にあるのかを事前に確認する。(2) JEFLL Corpus の「品詞検索」を利用し、学年別のサブコーパス(中学校から高校までの6学年)を使い、各動詞の頻度をクロス集計表に整理する。(3)作成したクロス集計表を基に SPSS14.0 でコレスポネンス分析を行い、各動詞と各学年との統計的な対応関係の結果を「文型」と「イベントスキーマ」の視点で別々に確認する。

調査結果として、(1) bigram 及び 4-gram の各範囲で観察したところ、「イディオムの句表現」で使われやすい動詞(e.g. go out)と、「自由選択的句表現」(e.g. 「become a+名詞」)で使用されやすい動詞があることが分かった。(2)コレスポネンス分析(文型)の結果、全ての学年で、SV、SVC、SVO の3種類の文型に親密であることが分かった。ただし、この傾向は、「イベントスキーマ」によって親密度に差が見られることも示唆された。(3)コレスポネンス分析(イベントスキーマ)の結果、12種類の動詞のうち、中高生のどの学年においても、be (Occurrence: States)、have (Possession)、like (Emotion)、go (Self-Motion) がよく使われることが確認された。一方、break (Action)、sell (Action Mid)、put (Caused Motion)、give (Transfer) については、相対的に未発達になりやすいことも確認された。

【実践報告】

パラレルコーパスを活用した学習者中心の英語授業

中條 清美(日本大学)

西垣 知佳子(千葉大学)

外国語の習得にはできるだけ多くの量の目標言語に触れることが望ましい。コーパス利用学習は、キーワードを含む例文を多量に示し、言語使用の実態観察を通して、語句の意味や文法の規則性を学習者自身が発見する帰納的な学習過程を生み出す。こうした膨大な量の英語との接触を通して「気づき」の機会を与える Data-driven Learning(DDL)は、英語との接触量が不足する我が国のような外国語学習環境においては、英語教育への利用価値は高いと言われる。しかし、英語コーパステキストの難しさ、指導法の欠如、インターフェースへの慣れの必要など、DDL を実際の外国語指導に取り入れるためには解決すべき問題点が多く、教育現場からの DDL 教材作成の試みや実践の報告は多くない。本研究は、日英パラレルコーパス(内山・井佐原、2003)を利用した大学初級レベルの文法指導、大学上級レベルの語彙指導、さらに新たな試みとして行っている日本語教育における DDL に関して教材作成と指導実践について報告する。

報告では、はじめに大学初級レベル学習者が一般英語授業において、名詞句と動詞句を中心に自立的に文法学習を行った DDL 実践について報告し、指導方法や文法タスクの実例を紹介する。また、過去3年間の指導実践から明らかになった指導効果についても述べる。続いて、上級者向けの DDL 語彙指導実践について報告する。この語彙指導は、新聞英語をとおして、中学・高校で学んだ教科書基礎語彙の意味と使用に関する知識を、実社会で使えるレベルに深めようというもので、実用になる語彙力の養成を目的として行われた。最後に、現在新たに取り組んでいるパラレルコーパスを利用した日本語教育用 DDL 教材の作成と実践の試みについて報告する。日本語教師が作成した日本語 DDL

教材からは英語教育に活かせる多くの知見を得ることができる。

【シンポジウム】

コーパスと統計で解き明かすポリティカルディスコース

司会 田畑 智司(大阪大学)

統計学を援用した言語データ分析の歴史は比較的早く、電子コーパス出現の遙か以前、単語の語長分布がテキストの書き手を識別する手だてになると考えたMendenhall(1887)までさかのぼることができる。以後、統計学と言語学の進歩に伴い、著者推定(Ellegård, 1962; Mosteller & Wallace, 1964; Burrows, 1989)、文体模写(McKenna & Antonia, 1994, 1996, etc.)、刑事事件供述の真贋判定(Svartvik, 1968; Coulthard, 2000)、聖書の成立過程に関する諸説の検証(Linmans, 1998; Mealand, 1999; Miyake et al., 2005)などの事例に統計学が応用され、問題解決に貢献している。

しかし、統計学とコーパス研究との結びつきは、何も上記のような先端的事例に限られたものではない。コーパスから得られたデータをもとに言語使用の実際を記述しようとするコーパス言語学は、いわば、「ことばの行動科学」であり、そこでは理論や仮説の検証のため、あるいは一見混沌としたデータの山から探索的に情報の鉱脈を掘り当てるための装備として統計学が重要な役割を担っている。キーワードやコロケーションの抽出はもとより、言語変種間における特定の言語現象の頻度差や、類義語間の用法の差異、さらには通時的言語変異など、少なくともcountable な言語項目を扱う限り、コーパス研究と統計は不可分の関係にあると言えるだろう。

本シンポジウムの狙いは、午前中のワークショップの講義内容および実習を土台とし、統計学的アプローチによってポリティカルディスコースの諸特徴を浮き彫りにすることである。各講師が独自の分析方法論と知見を示す一方、前田講師には専門的立場からの見解を示してもらい、コーパスへの統計学的アプローチの現状と課題について議論したい。質疑応答・全体討論のセッションではワークショップ担当の田中・小林両講師にも参加してもらい、フロアとともに活発な議論が交わされることを期待している。

語彙頻度と統計的手法：英国二大政党のマニフェストにみる特徴語

講師 高見 敏子(北海道大学)

言語研究に有用なソフトウェアのおかげで現在では容易に語彙などの頻度表が作れるようになった。しかし、その活用法については未熟な段階にあり、知見を蓄積して頻度表からより多くのことが読み取れるようになることが望まれる。一方で、コーパスから得られる各種のデータを扱う上で、印象的・主観的な判断ではなく、より客観的な判断を行う基準や指標としての統計的な手法の必要性が認識され、実際に活用されてもいるが、言語研究の目的と言語データの特性に合う、より妥当性の高い結果が得られる統計的手法を確立していくためにはさらに多くの研究を積み重ねていくことが期待される。

本発表ではポリティカルディスコースのテキストとして、英国の労働党と保守党の過去数回にわたる総選挙時のマニフェストを取り上げ、語彙頻度に対する統計的手法の利用の一例を示す。マニフェストに表れる語彙の違いの要因としては、政策の違い、時期による争点の違い、与党・野党という立

場の違い, など, いくつかのものが考えられる。そこで本発表ではマニフェストを事前に想定したグループに分けて比較するのではなく, 各マニフェストを独立したものとして語彙頻度の多重比較を行い, その結果として表れる語彙のタイプと出現パターンを特定するという探索的な分析を行う。

コーパスに基づく批判的談話分析：首相官邸英文メールマガジンの量的語彙解析

講師 石川 慎一郎(神戸大学)

言語は思想の器としてそれ自身は無色透明な媒体とみなされがちである。しかし, 言語やテキストは, 書き手と読み手の間に非対称の関係を生み出し, しばしばそこに政治性や思想性が生じる(Carter & Nash, 1990)。言語に隠されたこうした政治性・思想性を明らかにするのが批判的談話分析(critical discourse analysis: 以下CDA)の目的である。CDA は文体論研究の視点を援用し, 統辞的・範列的に他の表現方法が数多くありえた中で, あえて特定の言語表現が採用されたことに注目し, 言語表層の観察を通して言語構造の下部に埋め込まれたイデオロギーを明らかにしようとする(Flowerdew, 1997; Fairclough, 2000; Piper, 2000; 石川, 2005)。CDA は言語を社会的構造物と位置づけ, 言語と社会のダイナミックな関係性を明らかにする点で大きな可能性を秘めたものであるが, CDA が信頼できる成果をあげるためには, 量的データの客観的分析と適切な解釈が不可欠である。この点においてCDA はコーパスや言語統計と高い親和性を持つと言える。

本発表では, 2004年3月から2009年冒頭までの日本の首相官邸メールマガジンをコーパス化したうえで, 量的データの統計的分析の結果をCDAにつなげる可能性について検討したい。なお, 首相官邸メールマガジンは日本語版・英語版が同時に刊行されているが, あえて英語版を使用することによって, 形態素解析や表記ぶれといった日本語処理上の問題を回避することが可能になると考えられる。

多変量アプローチで俯瞰する歴代米国大統領就任演説の言語変異：Washington から Obama まで

講師 田畑 智司(大阪大学)

米国大統領の就任演説(Inaugural address)は, 大統領選挙を経て選任された新大統領が, 職務開始に当たって夢や希望, 抱負, 国家の課題などを明言する場であり, (先のBarack Obama の就任演説がまさにそうであったように)今日では米国民のみならず世界中が注目するイベントの一つでもある。大統領就任演説の英語は明快で格調高い文体で綴られたものが多く, それぞれ時代の英語の粋を投影したものであるといえる。他方, 各々が異なった基調や形式をもつほか, そのトピックには政治・経済・社会・文化など様々な面に関する当時の国内・国際情勢や有権者が支持するイデオロギーが反映されており, 批判的談話分析の研究対象としても興味深い言語資料である。

そこで, 本発表では, 多変量文体分析モデルによって米国歴代大統領の就任演説に見られる文体の変異やディスコースの特徴を俯瞰的に提示してみようと思う。たとえば, 1789年のGeorge Washingtonから2009年のBarack Obama にいたる就任演説56点の高頻度語100タイプの生起パターンを解析すると, 就任演説の文体がおおむね20世紀初頭を境にして大きく変異していることが浮き彫りになる。顕著な史的变化として, I-style からWe-style への変化, 関係詞節(特にped-piping構文)の減少, 属格標識('s)の増加, そして米国的価値観を宣揚する修辞の増加などを挙げることができる。また, 別の次元においては, 対話基調の演説と独白基調の演説のコントラストなどが高頻度語の生起パターンに反映されていることを明らかにする。

コーパス言語学研究における統計学的なアプローチは、今や有力な分析手法として確立されている。特に、言語解析技術の発達に伴い、従来は単語レベルに留まっていた統計手法の適用が、句や構文といったより高次の統語レベルに対しても実践され始めている。

本発表ではこうした現状に基づき、1789年のWashingtonから2009年のObamaに至る歴代米国大統領就任演説を対象に、特徴的に見られる統語構造の変異を統計学的に分析する。近年、コーパス研究において注目を集めている米国大統領就任演説の分析であるが、語彙分析や品詞分析などのアプローチと比較して統語構造の計量的な分析はこれまで手薄であったように思われ、本発表による新たな知見獲得を試みるものである。具体的には、各大統領就任演説テキストに統語解析を行い、各テキストにおける統語構造の生起頻度を計測する。それらの生起頻度を統計学的に分析し、個々の大統領就任演説における統語的特徴や、大統領演説間に見られる統語的変異について検証する予定である。

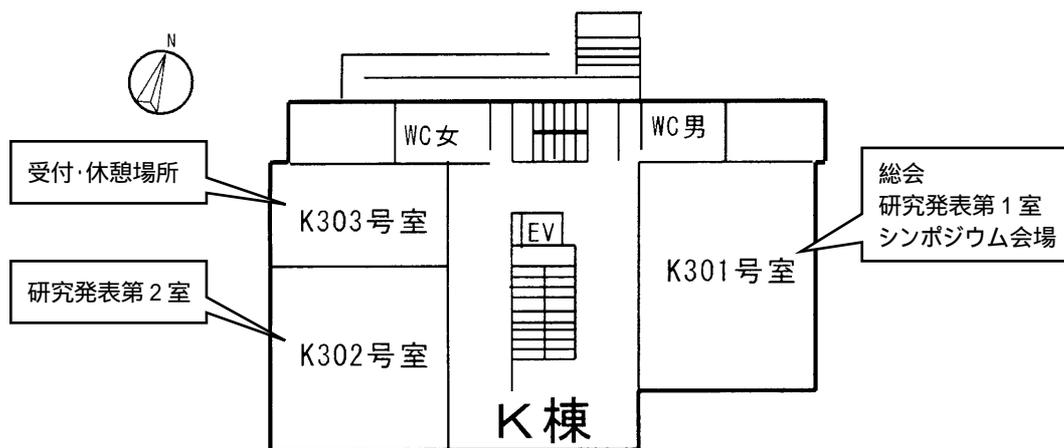
言語研究と統計：記述と推測

初等統計学のテキストを読むと、統計学には二つの考え方があり、記述統計学の後に推測統計学の方法が説明されていることが多い。これは正統的な考え方であるが、推測統計学には母集団と標本、推定とか検定、統計量の分布など、素人にはとっつきにくい話題も多く、ハードルになる部分でもある。記述と推測の違いは、手元の標本にだけ興味があるか、標本の背後にあるより大きな集団(母集団)というものに興味があるか、という違いに集約されるといってよいが、実は母集団概念を現実の世界に照らして十分に考察することは、意外と難しいかも知れない。

私見であるが、言語現象にはいくつかの特徴があって、この特徴は、統計的方法を用いて考察を行う他の分野での現象と少し異なる部分もあるように見受けられる。大規模コーパスを扱った研究を拝見すると特にその意を強くする。

本報告では、そのような言語を素材としたデータ解析を考える際に記述と推測といった違いを考えたことの意味や、「文科系」の人間にとってはハードルが高いように見える統計的手法の活用に関する「割り切り方」のようなものについて、私の意見を紹介したい。

教室配置図



(大会参加者へのご案内)

- 自家用車でのご来場はできません。
- ワークショップの受付は「D416 教室」の前で午前 9 時 30 分から行います。
- 大会の受付は「K303 教室」で正午から行います。
- 校内は分煙措置がとられています。指定場所での喫煙にご協力ください。
- 会員でない方も、「当日会員」として参加していただけます(会費 1,000 円)。

((昼食・アクセスについて))

1. キャンパス内および徒歩圏内の食堂・売店はすべて閉店中につき、昼食を取られる方は、駅前などで事前に弁当を購入のうえ、ご持参下さい。飲料の自動販売機はキャンパス内にございます。
2. キャンパス内は非常に迷いやすい構造ですので、神戸大学に初めておいでの方は下記をよくお読みください。また、最寄り駅からの写真付きアクセスマップを用意しました。印刷して携帯くださいますようお願いいたします。 <http://www11.ocn.ne.jp/~iskwshin/kaccess.html>

(最寄り駅 / 空港から会場までの交通案内) 所要時間・費用は目安です。

乗換 1 回, 所要 15 分, 費用 1500 円 **お薦め!**

新幹線で「新神戸駅」へ。駅前よりタクシーに乗りして「神戸大学国際文化学部 K 棟前」へ(15 分, 1500 円)。

駅前には各社タクシーが常時客待ちしていますが、電話で「神戸 MK タクシー」を呼ぶと 20-30%ほど安価です(上記は MK 標準料金)。予約電話番号: 078-303-6001。

神戸大は六甲山にキャンパスが点在しています。はっきり「国際文化学部」とご指示ください。

乗換 2 回, 所要 45 分, 650 円 (東から来られる場合)

新幹線で「新大阪駅」へ。JR 在来線(神戸線)に乗り換えて「快速」(神戸・姫路方面)に乗りして「六甲道」下車(29 分, 450 円)。駅前北側のバスロータリーより神戸市営バス 16 系統(六甲ケーブル下行)に乗りして「神大(シンダイ)国際文化学部前」で下車(10 分, 200 円)。

新大阪駅から (i)「新快速」(特急運賃不要)に乗りして「芦屋」で「普通」に乗換(所要 29 分)、(ii)「普通」に乗り(所要 45 分)などの方法もあります。

乗換 3 回, 所要 25 分, 400 円 (西から来られる場合)

新幹線で「新神戸駅」へ。「新神戸」より神戸市営地下鉄に乗りして「三宮」で下車(2 分, 200 円)。JR「三ノ宮」より JR 神戸線(大阪・京都方面行)「快速」または「普通」に乗りして「六甲道」で下車(7~10 分, 160 円)。以後、同上。

着駅が「神戸市内」の場合は新神戸駅で下車するときに有人改札を通り、在来線切符を返してもらってください。それがあれば JR 三ノ宮~六甲道間(160 円)は無料です。ただし、市営地下鉄は有料です。

乗換 3 回, 所要 45 分, 680 円

空路で「神戸空港」へ。「神戸空港駅」よりポートライナーに乗りして「三宮」で下車(18 分, 320 円)。JR「三ノ宮」以降は同上。

乗換 2 回, 所要 40 分, 費用 2320 円

空路で「神戸空港」へ。「神戸空港駅」よりポートライナーに乗りして「三宮」で下車(18 分, 320 円)。三宮駅前よりタクシーで「神戸大学国際文化学部」へ(20 分, 2000 円)。同じく「神戸 MK タクシー」が安価です。

(JR 在来線ご利用の方へ / キャンパス内で移動なさる方へ)

[1] JR 六甲道駅の改札は 1 か所です。改札を出て左に進むとバスロータリーがあります。ロータリーを左回り(時計回り)に 20 歩ほど進んだところにあるバス停から乗車します。神戸大行きのバスは何種類かありますので、必ず「16 系統六甲ケーブル下行き」を確認して乗車ください。

[2] 「神大国際文化学部前」バス停で降りた後は、進行方向に 10 歩ほど歩道を登り、左手の歩道を折り返して登ります。「陸橋を渡る」と、キャンパスの入り口です。

[3] 「午後のメイン会場 K 棟」へ行くには、正面の大階段を上らず、「階段の左側へ」進み、キャンパスの外周を回

る形で道なりに一番上の突き当たりまで進んでください。突き当たりのベージュ色のタイル貼りの5階建てのビルがK棟です。玄関はビルの右側にあります。

[4] K棟のガラスの玄関から建物の中に入り、階段を1階分上がってください。2階(ビル内ではこれを3階と呼称)がメイン会場です。

[5] 午前のワークショップ会場 D棟へ行くには、K棟正面玄関前から、山側に向かう小さい階段がありますのでこれを登ります。登り切ったところの右手にある4階建ての古いビルがD棟です。鉄のドアがあり、そこから建物に入るとすぐに階段があります。この階段を1回分だけ上がって2階(ビル内ではこれを4階と呼称)に着くと、すぐ右手が会場(D416教室)です。

[6] キャンパス内は迷いやすいので、JR六甲道駅から、市バスの代わりに、タクシーで「神戸大学国際文化学部 K棟前」まで来ることが可能です(7分, 900円)。この場合は近距離ですので駅前の客待ちタクシーに乗っても大差ありません。

キャンパスマップ



2009年3月9日 発行
編集・発行 英語コーパス学会
会長 赤野 一郎
事務局 〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1
大東文化大学 山崎俊次研究室内
TEL: 03-5399-7372 FAX: 03-5399-7373
E-mail: yamazaki@ic.daito.ac.jp
URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html>
